

氏名： 松崎 毅  
所属： 人間文化創成科学研究科文化科学系  
職名： 准教授  
学位： 文学修士（1985 東京都立大学）  
専門分野： イギリス文学、特に17世紀詩  
E-mail： matsuzaki.takeshi@ocha.ac.jp

#### ◆研究キーワード / Keywords

イギリス文学 / 17世紀 / 詩 / イギリス内乱 / キリスト教  
British literature / seventeenth century / poetry / English Civil Wars / Christianity

#### ◆主要業績

- ・『<男>と<女>のディスクール？シェイクスピアからドライデンまで』植月恵一郎編 1998年 金星堂（共著）「抑圧と表象？ヘンリー・ヴォーンにおける「時代」と「祈り」」pp.203-26.
- ・『博物誌の文化学？動物編』植月恵一郎編 2003年 鷹書房弓プレス（共著）「川瀬のゆくえ？『釣魚大全』の寓意」pp.117-32.
- ・「イギリス内乱期王党派の唄・俗謡・連祷？言論統制と大衆煽動」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第57巻 pp.177-88 2004年3月
- ・「「私」の沈黙が語るもの？“The World”における「説教師」のペルソナ」『英文学研究』Vol.82, pp.1-13 日本英文学会 2005年12月
- ・「王はそこに、されど汝ら王の御前には在らず」&O0a;? “The Kings Disguise”におけるチャールズ・スチュアートの不在」『お茶の水女子大学人文科学研究』第5巻 pp.69-80 2009年3月

#### ◆研究内容 / Research Pursuits

ここ数年、17世紀イギリス王党派の政治詩、特にこれまで文学正典として扱われてこなかったプロードサイド等の詩作品を対象に、その言説のあり方や「表象」に対する意識のありかたを考究してきたが、今年度はそのようにして得られた知見から逆照射するかたちで、ピューリタン詩人と言われ、また文学正典として評価の高い Andrew Marvell の詩作品を改めて読み込んだ。ピューリタンそして議会派の論客として知られる Marvell は、一方で同時代の王党派詩人たちとも価値観や文化的基盤を共有しており、その政治的アイデンティティーは多分に曖昧なところがある。作品の読み直しを通じて分かってきたことは、この詩人が、その使用する言語の隠蔽性や「表象」への意識において、同時代の王党派と極めて類似する要素を持っており、それゆえ、その政治的アイデンティティーは、あくまで疑問符つきのものとして扱われなければならないということである。

## ◆教育内容 / Educational Pursuits

コア英語科目は、ひきつづき教育支援ソフト Moodle を使い、学生が自宅から音声教材にアクセスしてリスニングを行ったり、練習問題の解答やフィードバックを行えるような工夫を試みた。また、リスニングの力が伸びない学生が多いことから、授業に音読を多く採り入れ、英語の音のシステムを自ら体得することを通じて受信能力を高めるといった工夫を試みた。

専門科目では、「英語圏言語文化概論」で John Bunyan の *Pilgrim's Progress* を扱い、英語圏文化の重要なファクターのひとつであるキリスト教、特にそのピューリタン文化のありかたを論じ、「英米文学演習（上級）」では、17世紀の女性文人 Margaret Cavendish の作品を読み、当時の女性の恋愛・結婚・家庭に対する考え方について理解を深めた。

大学院では、Andrew Marvell の抒情詩をテキストに、一般にピューリタン・議会派の論客といわれるこの詩人の政治的アイデンティティーの曖昧性について考察した。

コア英語科目は、近年の学部生の語彙力低下に歯止めをかけるため、単語テスト等を重点的に行うとともに、教育支援ソフト Moodle を使い、学生が自宅から音声教材にアクセスしてリスニングを行ったり、練習問題の解答やフィードバックを行えるような工夫を試みた。部分的に e-learning を採り入れたこのような授業形態は、今後も積極的に導入していきたい。

コア科目では、「基礎ゼミ」で、英語の詩をテキストに英語の音韻的な特徴を理解させるとともに、異文化の問題をより身近に感じさせるため、英語で書かれた詩についてできるだけ自由な討論を試みた。

専門科目では、「英文学史?・?」で古英語期から現代までの英文学の流れを論じ、大学院では、17世紀イギリス内乱期の政治詩をテキストに、表象行為の政治性という問題を論じた。

## ◆研究計画

近年の研究課題は、17世紀の詩と政治文学における隠蔽性という問題であるが、現在は、表象が実体（あるいはその不在）を隠蔽することにより生じる権威という問題に関心を寄せている。また、内乱期の王党派詩人たちに広く見られるこのような隠蔽的言語の振る舞いが、一般的にピューリタンで議会派とされている Andrew Marvell に見られることにも注目している。

2009年度は、Andrew Marvell の詩作品の再読を行うことにより、17世紀詩における隠蔽性の問題が、王党派・議会派といった政治的立場を越えてどれだけの広がりを持っているか、また、Andrew Marvell の政治的アイデンティティーとはどのようなものであるかを考察した。この詩人の政治的アイデンティティーについては必ずしも明確な結論が出るとは限らないが、少なくともこの詩人が同時代の王党派詩人たちとどれだけ共通の特徴を示しているかという点は明らかにしたい。

将来的には Aphra Behn などの女性詩人も射程に含め、17世紀詩の隠蔽的言語の振る舞いをさらに検証していきたい。

## ◆メッセージ

外国語を学ぶことは、その言語の運用能力を高めるだけでなく、言語を通じてなされる人間の様々な文化的営為を通じ、人間や社会や芸術について理解を深めることでもあります。言葉そのものよりも、言葉の向こうに何が見えるかを常に探求する姿勢を持ってください。また、そのような学生さんが入学してくれることを願っています。